

『兄おとうと』というアンサンブル劇

－歌う兄弟、姉妹、夫婦の考察から－

坂本 麻実子¹INOUE Hisashi's *Ani-Otouto*, An Ensemble Play
—Singing in Pairs of Brothers, Sisters, and Couples—

SAKAMOTO Mamiko

E-mail: msakamot@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：井上ひさし、兄おとうと、音楽劇、オペラ、アンサンブル

Keywords：INOUE Hisashi, *Ani-Otouto*, Music Drama, Opera, Ensemble

1. 『太鼓たたいて笛ふいて』から『兄おとうと』へ

2000年代初頭、井上ひさし（1934－2010）は劇作家としてモーツァルトのオペラに関心をもっていた⁽¹⁾。『夢の裂け目』の初日（2001年5月8日新国立劇場初演）の晩、女優の大竹しのぶが「わたしもこのような唄入りの芝居を演りたい」と言ったので、井上は「では、林芙美子の評伝劇を、宇野誠一郎さんとモーツァルトの音楽でなさいませんか」と誘い、大竹を芙美子役にして『太鼓たたいて笛ふいて』（2002年7月25日こまつ座初演）を発表した。ただし井上は宇野の音楽を使ったがモーツァルトの音楽を使わず、「モーツァルト先生のご都合で、ベートーベン先生とチャイコフスキー先生に代わっていただいたことをお詫びします」とした（井上、扇田2011:174－176）。この点について、井上はモーツァルトの音楽を使わずにモーツァルトのオペラの世界を彷彿させようと試みたと筆者は考えている（坂本2013）。オープニング・ナンバーの「ドン！」（原曲はロジャース作曲「ジップ」）というタイトルからしてモーツァルトのオペラ『ドン・ジョヴァンニ』（1787年初演）の「ドン」を想起させるが⁽²⁾、音楽プロデューサーの三木孝が芙美子に向かって軍部に

ほまれあれ」（原曲はベートーベン作曲「自然における神の栄光」）は『ドン・ジョヴァンニ』の中でドン・ジョヴァンニが村娘ツェルリーナを誘惑する場面での二重唱「手を取りあって」を踏まえた歌であろう。「やきもち亭主 待っていて すりこぎでからだ中 打ちますわ」（「女給の唄」。原曲はチャイコフスキー作曲「いつか夢で」）と歌う芙美子は、ドン・ジョヴァンニに靡いてしまったので婚約者に「ぶって、ぶって、マゼット」と歌って機嫌をとるツェルリーナと二重写しになって見える。芙美子の母キクと島崎こま子が手紙を書くときに歌う「文字よ 飛べ 飛べ」（原曲はベートーベン編曲のウクライナ民謡「美しいミンカよ、行かねばならない」）は『フィガロの結婚』（1786年初演）における伯爵夫人とスザンナの二重唱「そよ風に」（手紙の二重唱）に倣っている。そして井上は『太鼓たたいて笛ふいて』からわずか10か月後に『兄おとうと』（2003年5月13日こまつ座初演）を発表した。井上は『兄おとうと』でも『太鼓たたいて笛ふいて』と同様に男3人、女3人の合計6人の役者を起用した。そして井上は『兄おとうと』でも宇野の音楽を使いモーツァルトの音楽を使わなかったが、やはりモーツァルトのオペラを意識していたと筆者は考えたい。

『兄おとうと』は東京帝国大学教授で民本主義を提唱した政治学者の吉野作造⁽³⁾（1878－1933）と作造の弟で兄には懐疑的な農商務省キャリア官僚の信次（1888－1971）をダブル主人公とする音楽劇

¹ 富山大学人間発達科学部

である。作造の妻玉乃と信次の妻民代も実の姉妹なので吉野家の二組の夫婦は兄弟姉妹の関係にある。エリート同士だが互いの主義主張にこだわり、逢えば喧嘩して別れる夫たちを心配した妻たちは「兄弟が枕を並べて寝る」ための計画を立て、そこに貧しいが家族思いの庶民たち（井上が創造した人物を含む）が絡む。庶民たちは作造、信次、玉乃、民代を演じる4人以外の2人の役者（男1人、女1人）がそれぞれ1人5役を演じる。この2人は兄妹（石川太吉&春子）や夫婦（松本大吉&幸子）にも扮する。松本夫婦は井上が再演時に加えた役である（表1）。

実はモーツァルトのオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』（1790年初演）も二組の恋人の女性同士が姉妹という設定である（表1の付表）。『コシ・ファン・トゥッテ』の主要登場人物も男3人、女3人の合計6人であり、主人公は2人の士官フェルランドとグリエルモである。彼らはドラベッラとフィオルディリージの姉妹とそれぞれ婚約しているが、友人で老哲学者のドン・アルフォンソの発案で姉妹の貞操を試すための計画を立てる。老哲学者に懐柔された小

間使いのデスピーーナの手引きにより、変装したフェルランドはフィオルディリージを、変装したグリエルモはドラベッラを誘惑し、姉妹とも靡いてしまう。しかし偽りの求愛と知った姉妹は過ちを悔いたので恋人たちは元のさやに納まり、二組の新郎新婦となる。

井上自身は『コシ・ファン・トゥッテ』について何の言及もしていない。しかし「林芙美子の評伝劇」を「モーツァルトの音楽」^(ママ)を使って書く構想をもっていた井上ならば、『コシ・ファン・トゥッテ』を全く知らなかったとは言えないだろう。むしろ井上は6人の男女を対の関係に配して動かしていく『コシ・ファン・トゥッテ』の作劇術を承知しており、その上で兄弟と姉妹で夫婦になった吉野家の物語を6人の男女による音楽劇『兄おとうと』として書いたのではないか。そこで『兄おとうと』という音楽劇の特質を劇中歌（表2）から検討したい。なお『兄おとうと』は初演では1幕4場にプロローグとエピローグが付くという構成であったが（井上2003）、再演では1場を加えて2幕5場になった（再演は

表1. 『兄おとうと』の登場人物

吉野家の人々	[兄弟] 吉野作造&信次 [姉妹] 吉野玉乃&民代 [夫婦] 吉野作造&玉乃 吉野信次&民代
その他の人々	青木存義（Ⅰ-1） 山田巡查（Ⅰ-2） 美和作太郎（Ⅰ-3） 松本大吉（Ⅱ-4。幸子の夫） 石川太吉（Ⅱ-5。春子の兄）以上1人5役
	大川勝江（Ⅰ-1） 高梨千代（Ⅰ-2） 袁美琴（Ⅰ-3） 松本幸子（Ⅱ-4。大吉の妻） 石川春子（お春）（Ⅱ-5。太吉の妹）以上1人5役

備考：松本大吉&幸子夫婦は再演時に加えられた。

（付表）『コシ・ファン・トゥッテ』の主要人物

恋人	[真] フェルランド&ドラベッラ グリエルモ&フィオルディリージ [偽] 変装フェルランド&フィオルディリージ 変装グリエルモ&ドラベッラ
姉妹	フィオルディリージ&ドラベッラ
その他の人々	ドン・アルフォンソ デスピーーナ

備考：ドラベッラとフィオルディリージは台本ではどちらが姉か妹なのかは判然としないが、小瀬村（2002）に従ってフィオルディリージを姉、ドラベッラを妹とする。フェルランドとグリエルモは姉妹との結婚により義兄弟になる。

表2. 『兄おとうと』の劇中歌一覧

場面	通し番号とタイトル	原曲タイトル	原曲作曲者
プロローグ	①ふしぎな兄弟 (1回目)	ティティナ	ダニエルフ
I-1	②ふとんの唄 ③団栗ころころ	歓喜 団栗ころころ	シューベルト 梁田貞
I-2	④へそくりソング ⑤なぜ	ユモレスク 水玉たまれ (ポタン・タタン)	ドヴォルザーク 宇野誠一郎
I-3	⑥夢の街 天津 ⑦海苔のおにぎり	月娘 ミス上海	宇野誠一郎 高木和夫
II-4	⑧説教強盗の唄	ストライク・アップ・ザ・バンド	ガーシュイン
II-5	⑨逢いたかった	会いたかったぜ	宇野誠一郎
エピローグ	①ふしぎな兄弟 (2回目)	ティティナ	ダニエルフ

備考：井上（2003）より作成。③以外は井上が作った歌詞で歌う。①の1回目と2回目では歌詞は異なる。③は原曲の歌詞で歌う。⑧は再演時に加えられた（本文参照）。

2006年1月19日こまつ座初演)。時代設定は1幕1場が明治42年(1909)の暮れ,1幕2場が大正9年(1920)10月初旬,1幕3場が関東大震災直後の大正12年(1923)9月10日,2幕4場が大正15年(1926)初夏,2幕5場が作造の死の前年の昭和7年(1932)12月である。現在、『兄おとうと』は再演版により上演されており,2幕4場が再演時に加えられた場面である。本文中での引用は再演版(井上2010)による。

2. 『兄おとうと』の劇中歌

表2に示す『兄おとうと』の劇中歌全9曲について,③「団栗ころころ」は原曲そのものであるが,それ以外の8曲は井上が既成曲のメロディに歌詞を付けたものである。⑧「説教強盗の唄」は『兄おとうと』の再演時に加えられた。『兄おとうと』の初演版(井上2003)は井上が劇中歌とその原曲を記した「劇中歌リスト」を掲載したが,井上没後に刊行された再演版(井上2010)はなぜか「劇中歌リスト」を掲載していない。そのため⑧「説教強盗の唄」については再演時のプログラム(the座第51号2006年改訂版)を参照した。

『兄おとうと』の劇中歌の原曲を見るに,井上は幅広いジャンルの音楽から選曲した。①「ふしぎな兄弟」の原曲「ティティナ Titina」(ダニエルフ作曲)は欧米で流行し昭和初期の日本でもレコード化

された。チャップリンが主演映画「モダン・タイムス」(1936年)の中で歌ったことでも知られる。②「ふとんの唄」の原曲「幸福 Seligkeit」(シューベルト作曲, D.433)は芸術歌曲である。井上が劇中歌にシューベルトのメロディを使用したのは『兄おとうと』だけである。③「団栗ころころ」(梁田貞作曲)の作詞者の青木存義は作造とは宮城県尋常中学,第二高等学校,東京帝国大学の同級生であり,劇中では民代に失恋する文部省官僚として登場し,自作の「団栗ころころ」を歌う。「団栗ころころ」は唱歌ではあるが,井上は伴奏者に対して「シューベルトの歌曲のような美しいピアノ」(井上2010:473)を求めている。④「へそくりソング」の原曲「ユモレスク」(ドヴォルザーク作曲, op.101-7)はもともとピアノ曲として作曲された。井上がドヴォルザークのメロディを劇中歌に使用したのは『兄おとうと』だけである。「ユモレスク」にはヴァイオリン編曲版もあり,劇中では玉乃の演奏という設定でヴァイオリンによる「ユモレスク」のメロディも流れる。⑤「なぜ」の原曲「水玉たまれ」(宇野誠一郎作曲)は『ひょっこりひょうたん島』『マジョリタンの巻』の劇中歌(『ひょっこりひょうたん島』でのタイトルは「ポタン・タタン」)で子どもたちが歌う。井上は「ポタン・タタン」を「疑問,疑問」,「水玉たまれ」を「(疑問がわいたら)あわてず止まれ」と読み替えながら「なぜ」を作った。⑥「夢の街 天津」の原曲「月娘」(宇野誠一郎作曲)も『ひょっこり

ひょうたん島』「マジョリタンの巻」の劇中歌でサンデー先生が歌う。井上は「月娘」の中で何回も繰り返される「イエイエイ」を「テンシン」, 「いつかは帰る あの月へ」を「いつかは帰る あの街へ」と読み替えながら「夢の街 天津」を作った。⑦「海苔のおにぎり」の原曲「ミス上海」(高木和夫作曲)は宝塚少女歌劇団月組の1931年4月公演でのレビューである。⑧「説教強盗の唄」の原曲「ストライク・アップ・ザ・バンド」(ガーシュイン作曲)はブロードウェイ・ミュージカル『ファニー・フェイス』(1927年)のナンバーである。井上は少年時代からガーシュインを愛好したが⁽⁴⁾, 『兄おとうと』の再演時に初めてガーシュイン・メロディを使って劇中歌を作った。⑨「逢いたかった」の原曲「会いたかったぜ」(宇野誠一郎作曲)も筆者は『ひょっこりひょうたん島』の劇中歌と推測するが出典を確認できなかった。

3. 『兄おとうと』の劇中歌の歌い手たち

『兄おとうと』ではある時は男だけで、またある

時は女だけで、時には男女が一緒になって大いに歌う。表3には『兄おとうと』の劇中歌の歌い手と歌唱順序を示す。

プロローグの①「ふしぎな兄弟」(1回目)は6人が男女, 男同士(兄弟), 女同士(姉妹)の三組に分かれて歌う。リフレイン部分は6人全員で歌う。まず青木&勝江(吉野作造宅の女中)が挨拶する。次に作造&信次がそれぞれ自己紹介をする。最後に玉乃&民代が夫たちの不仲を案じて「兄弟が枕を並べて寝る」ための作戦を立てていることを明かす。1幕1場の②「ふとんの唄」は作造宅での1回目の作戦中の歌であり, 吉野家の女性たち3人が兄弟のふとんを敷く場所を確認するために歌う。原曲の「幸福」は3節から成る有節歌曲であり, 井上は各節の前半部分を玉乃, 勝江, 民代に独唱させ, 後半部分をリフレインとし, 1節と2節のリフレインは女性たち3人に, 3節のリフレインは女性たちに作造, 信次を加えて歌わせた。③「団栗ころころ」は『兄おとうと』唯一の独唱曲で青木が歌う。1幕2場の④「へそくりソング」は江戸川沿いの料理旅

表3. 『兄おとうと』の劇中歌の歌い手たち

場面	通し番号とタイトル	歌い手の人数と歌い方
プロローグ	①ふしぎな兄弟 (1回目)	6人 勝江&青木, 作造&信次, 玉乃&民代の順で歌う。 リフレインは6人全員で歌う。
I-1	②ふとんの唄	3人→5人 玉乃, 勝江, 民代の順で歌う。第1節と第2節のリフレインは玉乃, 勝江, 民代の3人で歌う。第3節のリフレインは作造, 信次も加わり5人で歌う。
	③団栗ころころ	1人 実際の作詞者である青木存義が独唱する。
I-2	④へそくりソング	4人 玉乃&民代と作造&信次で掛け合い, 最後は4人で歌う。
	⑤なぜ	2人 作造&千代で歌う。
I-3	⑥夢の街 天津	2人→3人→2人 玉乃&美琴, 玉乃&美琴&民代, 作造&美琴の順で歌う。
	⑦海苔のおにぎり	5人 玉乃, 美琴, 民代, 作造, 信次で歌う。
II-4	⑧説教強盗の唄	2人→3人→5人→1人→6人 玉乃&民代, 玉乃&民代&信次, 玉乃&民代&信次&大吉&幸子, 作造の順で歌い, 最後は6人全員で歌う。
II-5	⑨逢いたかった	2人→4人→2人 春子&太吉(玉乃&民代はハミングコーラスを付ける), 玉乃&民代&春子&太吉, 作造&信次の順で歌う。
エピローグ	①ふしぎな兄弟 (2回目)	6人 信次&民代, 作造&玉乃, 太吉&春子の順で歌う。 リフレインは6人全員で歌う。

館での2回目の作戦中の妻たちと夫たちによる掛け合いの歌で、玉乃&民代が「へそくりは女の才覚」と歌えば作造&信次が「男を丸めてせっせとためてゆく」と返す。⑤「なぜ」は一転してシリアスな歌で、作造&千代（弟の学資を稼ぐために働く姉という設定）が教師と生徒のようにペアになり「考える」行為の大切さを歌い上げる。1幕3場の⑥「夢の街天津」は信次宅で3回目の計画を実行した翌日の歌である。関東大震災後の混乱に乗じて右翼青年の美和作太郎が作造を暗殺しようと東京帝大の研究室に侵入し、居合わせた玉乃たちが作太郎と揉み合いながら歌う。まず玉乃と美琴（袁世凱の娘。作造は美琴の兄の家庭教師をしていたという縁がある）が歌い、続いて民代も加わる。次に作造と美琴が歌う。⑦「海苔のおにぎり」は1幕の終曲で作太郎を追い払った玉乃、民代、美琴、作造、信次の5人が昼食のおにぎりをほおぼりながら歌う。

2幕4場の⑧「説教強盗の唄」は信次宅での4回目の計画中に婦唱夫随の説教強盗（石川幸子&大吉）が押し入り、不仲の兄弟が財布を盗られた上に幸子から説教されたときに歌う。原曲のヴァース（リフレインに入る前の部分）は説教強盗に気づいた玉乃&民代が歌い、途中から信次が加わる。リフレインの1回目は玉乃、民代、信次に幸子と大吉が加わって5人で歌う。次にリフレインの冒頭だけを作造が1人で歌い、最後にリフレインの2回目を6人全員で歌う。2幕5場の⑨「逢いたかった」は2幕の終曲で、箱根の旅館での5回目の作戦中に三組三様の「きょうだい」たちが出揃って歌う。吉野家と同宿だった太吉&春子が幼い時分に生き別れた兄妹だったことがわかり、再会した兄妹が手を取り合いながら「逢いたかった」を歌い、それに感動した玉乃&民代がハミングコーラスで加わる。次に「逢いたかった」の終盤部分を太吉&春子兄妹と玉乃&民代姉妹の4人で歌う。それを見た作造&信次は兄弟喧嘩をやめ「なぜか突然」（井上2010：532）に「逢いたかった」の終盤部分を歌い出す。兄弟の歌は「一回目は不揃い」だったが、二回目は「すばらしい二重唱」になり（井上2010：532）、がさつだが情愛の深い兄妹の姿が依怙地なエリート兄弟に強い印象を与えたことを暗示する。しかし妻たちの5回にわたる計画も夫たちの仲を直すことはできず、その後の兄弟は別々の道を歩む。エピローグの⑩「ふしぎな兄弟」（2回目）はプロローグのときと同様に6人

が三組に分かれて歌い、リフレインは6人全員で歌うが、兄弟・姉妹のペアは夫婦に代わった。まず信次&民代は軍部が政治に介入し民主主義が後退する時代に作造が受け入れられず無念の死を遂げたことを報告する。次に作造&玉乃は信次が商工大臣に任命され戦時下の産業統制政策を担ったことを報告する。最後に太吉&春子は大吉が太平洋戦争下の空襲で死に、春子が戦後の満州からの引き上げ途中で死んだことを報告して幕となる。

以上、『兄おとうと』では独唱曲は1曲のみ、残り8曲は6人の登場人物を2人から3人、4人、5人、6人まで自在に組ませて歌わせている。『兄おとうと』はアンサンブル中心の音楽劇なのである。

4. 夫と妻のアンサンブル劇

井上はこまつ座に書き下ろした作品には6人の役者を起用することが多かった（坂本2009）。こまつ座のための「6人もの」は10本あるが、そのうち男3人、女3人の組み合わせで書いたのは『泣き虫なまいき石川啄木』（1986年6月6日初演）、『太鼓たたいて笛ふいて』、『兄おとうと』、『組曲虐殺』（2010年10月3日初演）の4本である。ただし『泣き虫なまいき石川啄木』では啄木の実人生があまりに悲惨だったので井上は劇中歌を作ることができなかった。『組曲虐殺』の劇中歌はすべて井上の作詞、小曾根眞作曲のオリジナル曲である。『太鼓たたいて笛ふいて』と『兄おとうと』は井上が既成曲からメロディを選んで歌詞を付けたものを劇中歌にしており、ある意味、4本の中では井上が音楽の領域に最も深く関わっていたと言える。

井上は「主役も脇役も同じように活躍するという方法論」（井上1988：206）で芝居を書いてきた。井上は歌についても同様に考えており、役の軽重にかかわらず出演者全員に歌わせた。『太鼓たたいて笛ふいて』でも『兄おとうと』でも6人の役者に歌を割り振った。しかし、大竹しのぶのために書かれた『太鼓たたいて笛ふいて』では歌のハイライトシーンも芙美子役の大竹が担う。一方、『兄おとうと』を見ると主役の作造&信次兄弟が言語のレトリックを駆使して政論を戦わす場面は『兄おとうと』の見せ場であるが、兄弟が他の登場人物に比べて突出している印象は少ない。それは劇中歌の割り振り方と関係があるのではないか。

『兄おとうと』では主役が歌のハイライトシーンを担っているように見えない。まず作造も信次も1曲を通して歌い切ることがない。唯一の独唱曲「団栗ころころ」は脇役の青木が歌い、青木の人物紹介の歌である。むしろ玉乃&民代こそ『兄おとうと』の歌の主役であろう。玉乃と民代には「団栗ころころ」と「なぜ」以外の7曲も割り当てられた。中でも「へそくりソング」では歌詞の行数でみると玉乃の独唱に8行、民代の独唱に8行、玉乃&民代の二重唱に14行が割り振られているのに対し、作造&信次の二重唱に割り振られたのは6行にすぎない。作造にも信次にも独唱はなく、最後に作造、信次、玉乃、民代の四重唱に4行を割り振って「へそくりソング」を締めくくる。そして玉乃&民代は「ふとんの唄」で歌っているように「兄弟(=夫たち)が枕をならべて寝る」計画の立案・実行係でもある。『コシ・ファン・トゥッテ』に引付けて言うなら、玉乃&民代はヒロインのフィオルディリージ&ドラベッラに相当し、ヒロインの貞操を試す計画を立案し実行するドン・アルフォンソとデスピーナの役どころも兼ねている。

『兄おとうと』は「主役も脇役も同じように活躍する」ために独唱よりも6人の登場人物を2人から6人までのアンサンブル・ユニットを主体とする音楽劇である。ただしアンサンブルに積極的にかかわって歌うのは主役の兄弟・夫たちではなく相手の姉妹・妻たちの方である。セリフの主役と歌の主役を夫婦で分業にしたという意味で『兄おとうと』は夫と妻のアンサンブル劇と言えるだろう。

注.

- (1) 井上の長年にわたるオペラへの関心については坂本 2018 参照。
- (2) 原曲のタイトルの読み替えは『私はだれでしょう』(2007年1月22日こまつ座初演)のオープニング・ナンバー「耳」(原曲はロジャース作曲「ミミ」)でも見られる。なお井上は『ドン・ジョヴァンニ』のベーレンライター版ヴォーカル・スコアを所有していた(仙台文学館 2016)。
- (3) 作造は井上の出身校の仙台第一高等学校(宮城県尋常中学校として開校)の先輩であり、その縁で井上は吉野作造記念館の名誉館長に任命されていた。

- (4) 井上のガーシュイン愛好については坂本 2012 参照。
- (5) 玉乃役で起用された剣幸は宝塚歌劇団出身で歌の専門的訓練を積んでいる。井上は剣に「歌のたのしさ美しさをわたしたちに改めて教えてください」と賛辞を送っていた(井上 2003:150)。

参考文献.

- 井上ひさし(1988)「連続対談 ひさし劇場③井上ひさし、宇野誠一郎」『きらめく星座 昭和オデオン堂物語』収録 東京:集英社
- 井上ひさし(2003)『兄おとうと』(初演版)東京:新潮社
- 井上ひさし(2010)『兄おとうと』(再演版)『井上ひさし全芝居 その六』収録,東京:新潮社
- 井上ひさし,扇田昭彦(2011)『井上ひさし』東京:白水社
- 小瀬村幸子訳(2002)『モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ』(オペラ対訳ライブラリー)東京:音楽之友社
- 坂本麻実子(2009)「井上ひさしと6人の役者による音楽劇」『富山大学人間発達科学部紀要』4-1, pp.135-140
- 坂本麻実子(2012)「ステージピアニストの作り方—井上ひさしの音楽劇のピアニスト考—」『富山大学人間発達科学部紀要』6-2, pp.235-241
- 坂本麻実子(2013)「井上ひさしとモーツァルト—『太鼓たたいて笛ふいて』に残るオペラへの見果てぬ夢—」『富山大学人間発達科学部紀要』7-2, pp.163-172
- 坂本麻実子(2018)「井上ひさし『ヴェルディとボーイト』構想—劇作家とオペラをめぐる—」『社会文学』48, pp.85-89
- 仙台文学館(2016)『ドラマ・ウィズ・ミュージック—井上ひさしの音楽世界』展示図録,仙台:仙台文学館
- (2019年5月20日受付)
(2019年7月17日受理)